

2020年9月23日

経済産業省金属課 御中

全国鉄鋼販売業連合会

2020年9月経済産業省金属課ヒアリング資料

(全鉄連・阪上会長)

<7～9月期の需要動向>

(製造業界) 個別企業により格差はあるが、大幅な減少となった4～6月期と比較すると自動車、小型建機には改善の動きが顕著にみられたが、その他業種においては前期の落ち込み幅もまだ小さかったこともあり、昨年来の低調推移に大きな改善は見られなかった。

(建設業界) 公共土木に関しては季節要因より、やや低調ながら堅調に推移。建築に関しては、大型の継続案件に関しては年初より前年を1割程度下回るレベルながら改めて中止等の動きは見られないものの、中小案件に関しては計画の中止、延期等がみられ前年比での減少幅は大型案件と比べると拡大傾向となっており、結果、中小ファブでは一部手空き業者も散見される。

(業界状況) 自動車向け比率の高い薄板、特殊鋼メーカーへの鋼材発注は回復傾向がみられ、またコイルセンターの稼働率も若干回復してきているが、その他業種向け比率の高い、厚板、条鋼建材品種には改善が見られない。当団体傘下企業においては、販売数量減、販売利鞘縮小等により収益悪化が止まらず非常に厳しい状況です。

<10～12月期の需要見通し>

需要期であり、全般的に絶対値は前期より改善すると思われませんが

(製造業界) 引き続き一部業種、企業においては、コロナ影響からの回復基調が継続するものと思われるが、企業設備投資見直しに加えて、予定案件でもコロナに伴う受発注打ち合わせの遅れによる停滞も出ており産業機械向けなど多くの業界では大幅な回復には至らず、鋼材需要も前年割れが続くものと思われる。

(建設業界) 公共案件は引き続き堅調推移が見込まれます。

(建築) 前年、前々年出件の大型案件は前年割れながら継続施工見込みです。今年度の出件案件では物流倉庫関係のみ前年比でまだ堅調に出件されていますが、その他は前年割れが続く見通し。また、中小案件ではコロナ影響により前期よりさらに中止、延期の影響が拡大すると思われ。当期需要は前期以上に、前年比減少幅拡大懸念が大きい。

また、来年施工の案件では、GC間での受注競争が激化してきており、安値での受注が増えてきております。同時に鉄骨工事も大手FABでも来年の工程がまだ手空きの企業が多く、受注価格の値下がりが顕著になっております。

(要望事項) 先般、ヒアリングいただきましたミルシート様式統一化、業界用語等の標準化問題は自社内だけの事務合理化、効率化だけに留まらず、個別、グループ間の企業の枠を超えた業界全体としての事務合理化、効率化を進めるには必須条件と考えます。

貴省の強力なバックアップをお願い申し上げます。

(東京・齊藤副会長)

鉄鋼加工販売業者も、新型コロナの影響がじわじわと出始めている。3～4月にかけては、受注残の仕事（納入）が続いた。50%減という極端に悪い数字にはならなかったが、夏前より経済活動が再開されても、受注残を残している業者は別として、一般的に新型コロナ以前の状況にまで戻すことは難しい。もともと今年はオリンピックが意識され、工事業者が6～9月まで作業を減らし、止めるという計画であったため経済復活後も大きな痛手を負ったとの感は弱く、これから秋以降の受注に左右されるものと思われる。我々の業界はこれからボディブローのように業績に影響してくる。秋以降の業績回復のために設備投資に使える助成金、補助金の支援による需要創出や公共事業の前倒しをお願いしたい。今後、業界全体の不安定さが信用問題に大きく関係していくだろう。秋までにより一層の需要が出るよう仕事量を増やしてほしい。

(新潟・澁井副会長)

<需要動向> コロナ蔓延以降、新規需要はほとんどない状態であったが、ここに来てやや落ちついてきた感はある。需要は相変わらずないが、先の見通しとしては改善傾向にある。
<市況> 海外情勢、原料事情、メーカー事情を勘案すれば、短期的には市況は上がりそう。ここに需要が加われば、一気に雰囲気が変わりそうであるが・・・
<今後の見通し> コロナの状況で大きく変わりそう。第3波が深刻でなければ緩やかに良くなっていくが、昨年のように非常事態となれば、いままでのいいムードは全てなくなってしまふだろう。
<問題点> 東京、大阪等感染者が多数出ている都市から訪問してほしくないという気持ちが地方には強い。特に新潟でも新潟市以外の地域は拒否反応が凄まじい。我々も東京等に出張すると暫くは隔離されてしまう。移動に対する意識はなんとかならないものなのか？

(東京・井上常任理事)

<需要動向> 製造業向けの荷動きは4～6月に大きく落ち込んだが、7～8月に入り自動車を中心に持ち直しつつある。ただ、建築については逆に4～6月まで継続工事があり堅調に推移していたが、7～8月はオリンピック開催に備えた物件の減少とコロナの影響が重なり大きく減少している。中小物件では工事の遅れや計画の見直しも出ており、今後が心配される。現在、動いているのは物流倉庫ぐらいでオフィスや住宅の計画の見直し、サプライチェーンの見直しが今後予想され影響は大きい。
<在庫状況> 高炉の減産と中国需要に支えられた輸出の増加で国内の在庫は減少している。輸入材も流入が増える状況でないためしばらくタイトな状況が続くと思われる。
<市況状況> 高炉も電炉も原料価格上昇のため、製品値上げに注力している。ただ需要は完全に戻ったわけではないので慎重な対応が望まれる。

(東京・山岸常任理事)

7月末の薄板三品在庫は397万2千トン。6月比32万9千トン減少した。5月以降の急激な需要減により、国内高炉メーカーの減産、高炉のバンキング（一時休止）、輸入材申込の減少により2017年7月以来、400万トン割り込んだ。コイルセンター、問屋ともに5月以降、20～30%の前年割れが続く中、各企業では在庫調整が整っているが、この環境下、東鉄連市場調査委員会のアンケート結果を見ても分かる通り、400万トンを割り込んでいてもいまだ過剰気味の状況。鉄鉱石4～6月は82ドル、7～9月は83ドル。原料炭が4～6月で135ドル、7～9月で110ドル。鉄鉱石は10～12月100ドルを超えそうである。高炉メーカーは厚板の値上げを発表しているが、薄板もこれから値上げを発表するのではないか。中国の情勢回復により、ポスコ、CSCも強姿勢である。9月に入っても、我々二次流通では回復感を肌で感じとれない状況である。建築関係は、消費税、新型コロナの影響で、リーマンショック以来の80万戸割れで73万戸まで減少すると予想さ

れる。この先、流通は仕入高とユーザーへの価格転嫁との狭間で厳しい状況が続く。末端需要の喚起およびひも付き価格の値上げの実行を待たれるところである。

(東北・川勝常任理事)

公共工事、風力発電などの新エネ、去年の台風の復旧工事や新型コロナ前の民間物件、病院などが動いているが、建築物件は下期および来期以降の見通しが立たない。このような状態ではスクラップの値上げ、メーカーの値上げはあれど客先への転嫁は思うようにならない。この先も新型コロナ次第で、非常に不透明と思われる。

(東京・東鉄連市場調査委員会報告2020.9.15)

棒鋼部会

(鉄筋・店売り) 鉄筋の場合、在庫をしているのは、ほとんど電炉メーカーで1日あればどんなサイズでも持ってきてくれる。関東の電炉メーカーは約20万トンの在庫を抱えている。メーカー直送できない小口物件や切断加工を我々特約店が担って商売している。前年対比15%位減少が続いている状況。市況は3月から半年間変わっていない。4月、5月、8月はかなり悪かった。在庫は2週間分なので、徹底して絞っている。秋需の気配は全くない。去年の数字をみると去年はよかった。限られた需要の中で商売を持続していくしかない。車の引き取り台数、伝票の枚数は変わらないが、伝票の中身(量)が少なくなっており、粗利が低下している。

(鉄筋・直送) 販売量は前年対比で15%減位である。7月までは耐えていたが、8月はかなり落ち込んだ。鉄鉱石も上がり、9月9日の鉄源協ではスクラップ29370円、前月比2150円ほど値上がりしている。価格はわずかだが強含みである。ホテルの計画等が中止になっている。建築関連も大型物件はあるが、我々流通の仕事である中小物件が少ない。秋需は期待できない。静岡の新東名高速道路など、土木関係の仕事が下期に出てくるのではないかと。年度末までには黒字になるようにしたい。

(平鋼) 8月の盆休み前、盆休み明けも悪かった。販売量は前年同月比でも2割以上落ち込んでおり、在庫も2割以上減らしている。建築関係は、年初から決まっているものは動いているが、中小物件が少なく9月以降も少ない。建産機関係は秋口以降出てくるという話もあったが、低調が続いている。トラックも大幅調整が続いている。メーカーの生産量も大幅に減少しており、5万トン台が続いている。流通も在庫調整しており、荷動き以上の落ち込みになっている。スクラップ価格が上がっており、某電炉メーカーが値上げ発表したため平鋼メーカーも追随して上げてくるのではないかと。年内の需要回復は難しいので厳しい状況は続く。コロナ禍で積極的な営業ができないことが課題である。

形鋼部会

(形鋼概況) 東鉄連形鋼調査によると8月の販売総量は前月比13.8%減であった。入庫は3.9%減、倉出販売は14.6%減。在庫は0.5%減とほぼ横ばいとなった。品種別の倉出販売をみるとH形鋼が12.7%減、一般形鋼は19.2%減、コラムが4.9%減という結果となった。全品種減少している。

(一般形鋼) 8月の一般形鋼の販売総量は前月比14.8%減、前年同月比で24.4%減という結果となった。建築土木の落ち込み、新型コロナの影響であった。7月動き始め、8月、9月と増えていくのだが特に建築案件の減少傾向である。今年度は良くない。建築関係の需要が乏しい。山形鋼も2ヶ月、3ヶ月先延ばしになっている。溝形鋼は6月まで引き合いがよかったが、7月、8月は悪くなっている。加工については小口短納期の商売となっている。電炉、高炉ともロールに余裕はある。スクラップの高騰もある。建築案件の先に見えない。

某電炉メーカーは一般形鋼、H形鋼の販売価格を据え置きとしたため、流通では値上げトーンが下がっている。これからの課題は慎重な仕入、販売である。

(H形鋼) 8月の倉出し販売8千トン台で5月と同じ水準でした。ときわ会在庫は3ヶ月連続で在庫が減少。現在は16万トン台となっている。7月の建築着工に基づく全建築は35万6千トン。前月比1万3千トン減。前年同月比で12万6千トンの大幅減であった。建築向けに関して、大型物件はあるが中小物件がない。鉄骨単価と加工賃が下落している。ゼネコンの仕事量が少ないため取りあいになっている。土木案件に関しては底堅い需要がある。某電炉メーカーでは、H形鋼の価格を据え置いたが鉄鉱石、スクラップの原料価格が徐々に上がっているため次回、値上げするのではないかと。ユーザーの反応が、全くないので厳しい状況である。今期は期待薄。

(コラム) 7月、8月と引き合いは低調。9月に入ってから荷動きに期待していたが、変化なし。加工に関しては継続している。プレスコラムが堅調で忙しいという記事が掲載されていたが、我々二次流通には直接関係ない。2、3ヶ月前に9月以降、徐々に増えてくるという話があったが来年3月以降にずれ込み暫くは我慢しなければならない。

(軽量形鋼) 比較的、落ち込みが少ない。多少、物件も出てきている。納期に余裕のないものもあり、忙しい場面もある。特に物流倉庫関連が堅調である。年内の加工は忙しい。メーカー動向は、高炉メーカーの影響をうけて、溶協メーカーも徐々に値上げを匂わせている。

薄板部会

(薄板概要) 7月末の国内向け薄板3品在庫は397万2千トン。32万9千トンと減少し、2017年7月以来、3年ぶりに400万トンを割り込んだ。しかし、まだまだ需要に対しての在庫量は多い状況。8月の販売量は前月比日割りでは約2割増加しているが、稼働日数が足らなかった。しかし、前年同月比では2割程減少している企業がほとんどである。需要家の中でも建設、空調関係は、全体で約1割減、関東近郊では約3割減であった。学校向けのタブレットケースの需要が各自治体から出ている。土木、ガードレールは東北の方で動いている。産機、建機は低調。ゲーム機も落ち込んでいる。市中玉出回り状況では確かに歯抜けは出ているが、需要家、商社の在庫調整し、メーカーの減産で在庫調整できているのではないかと。高炉メーカーが2強になり、なかなか思ったような申込ができない。このコロナ禍で、最小限の申し込みをしている。契約残は減少している。需要が盛り上がりという意味ではないが10月から潮目が変わってくるのではないかと。自動車の生産も戻り、鉄源不足、旧日新製鋼の呉製鉄所閉鎖準備に伴う影響が出ており、メーカーは値戻しを余儀なくされる。

(表面処理鋼板・店売り) 薄板3品在庫は400万トンを割れになったが、我々流通が申し込みをカットし、高炉メーカーが高炉を止めて生産調整している。需要が盛り上がっていないので当然のことである。ただ、この需要のない中での値上げは、我々流通の先にある取引先やユーザーも厳しい状況になると思われる。鉄鉱石の値上げなどの影響もあるのは理解できるが、メーカー値上げを先延ばしできないものか。潮目が変わったというよりは、メーカーが無理して雰囲気を作っている気する。我々流通は翻弄されている状況。但し、メーカーあつての流通なので仕方がないことなのかもしれない。悔しい思いもするが、材料あつての商売なので仕方がない。状況を見ながら売れる物を売っていくしかない。

厚板部会

(厚板概要) 東鉄連厚板部会在庫販売調査によると8月販売量は10.6%減、在庫量は4.9%減で販売、在庫とも減少した。前年比では販売量15.7%減、在庫量14.4%減と大幅減となっている。在庫量は、今年3月より右肩下がりで減少している状況。

最悪期は脱しているが、相変わらず低調な商いが続いている。建産機は減産が続いており、10月以降回復する気配はあるが、V字回復までには至らない。土木は低調で10月以降、若干の動きが見られる話を聞いている。建築は低調。素材販売は、どの品種も低調。敷板だけが荷動き活発。ひも付き、店売り関係なく低位安定である。8月の荷動きは前月比、日割りでは変化なし。メーカーは、厚板の値上げを宣言されており、某電炉メーカーも値上げを発表した。今後、他メーカーにも波及するだろう。しかし、ロール自体はタイトではない。メーカーの生産調整、台風の影響もうけて一部の品種に関しては品薄感が出てきた。大半の市中在庫は適正である。先高感も全品種に出ており、値戻ししている品種もある。現状、極端な安値玉はなくなっているが、ユーザーへの価格転嫁は厳しい状況。スクラップ価格が上昇

してきたためユーザーにも値上げ警戒感が出てきた。市中在庫の絶対量が少なくなってきたため不足ぎみになった品種も出てきた。新型コロナの状況にもよるが、これから秋以降、現状より良くなる期待している。市況は全品種強含んでいるが、中でも敷板がかなり強含んでいる。

(コイル中板) 8月のレバラーの稼働状況は前月比93%。前年同月比78%。厳しい状況が続いている。ひも付き販売についてトラックは、2020年度上期の生産計画は2019年度下期比56%で約半減した生産計画となっている。2020年度下期に関しては下期プラス14%の生産計画になっており、上期よりは増産する方向である。某建機メーカー（国内工場）では2020年度の実績は2019年度比85%。第3四半期は第2四半期比20%増。第4四半期は生産数量を落とす方向だったがほぼ横ばいに調整した。建機、トラックに関しては最悪期を脱しつつあると思われる。ダンプの4トン車は輸出が好調。店売り販売は、依然と変わらず低調。自動車の輸出は好調だが、複数高炉のバンキング（一時休止）のため100%の申し込みに対してカットするような動きがみられる。需要は仮需の動きが出始め、引合いは増えているが、物が無いので対応できていない。9月から値上げを進めている企業もあり、若干潮目が変わりそうな雰囲気である。

(厚板定尺) 4月以降は2～3割減の荷動き状況。特に5月が悪く、3割以上落ち込んだ企業もある。8月も悪かった企業もあり、先行き見通せない状況が続いている。在庫は、減少している。荷動きが悪い状況の中、仕入を減らしている。場合によっては、ほぼ申込みをスキップしている状況。在庫の回転が悪い中、高値の在庫もあるため逆ザヤの商売もある。メーカー値上げの話もあり、先高感が出ているので仮需も多少出ているが再販価格を上げる状況までには至っていない。再販価格に値上げを転嫁できる状況には程遠い。

(縞板) 7月の販売量は6月比ほぼ横ばいであった。8月はお盆休みもあり、3割位減少した。8月出荷数量は7月比、約2割強減少（素材販売17%減、切板が約25%減）。日割りだと前月比1割増加しているが、前年同月比で約2割減少した。他の部会と同様店売り向けの販売が低調している。直需向けの物件では、物流倉庫など新規物件も出ている。土木向けの基礎杭が好調。9ミリ、12ミリの厚物が出ている。直需向けは10月、11月以降とシステム建築、立体駐車場のパレット向けなどの需要があり山が高い。物件によっては1年先送りのものも出ている。店売りのスポット物件の商売は取り逃さないように心がけている。

鋼管部会

(鋼管概要) 土木建築関係の鋼管杭が吐出して良い状況。その他の業種は良くない。自動車、トラックも底は打っているが需要の力強さが感じられない。もう暫くこのような感じである。建産機は厳しい状況で先が見えない状況。中国の方で助成金があり、その影響で少し需要が出始めた話も出ている。プラント関係の配管は、秋に期待しているが、過度な期待は禁物。価格は現状維持。溶協品は、まとまると安値も出ている。荷動きが悪いわりに在庫はそれ程増えていない。

(高炉品) 8月の状況は稼働日数の影響もあるが、雰囲気自体がよくない。申し込みを抑えているので適正在庫より若干多めで踏ん張っている。価格面は据え置き。原材料の値上りから値上げの申告を受けた企業もある。納期遅れが出ている品種もあるが、出荷が低迷しているので影響ない。建築設備向けは、秋口より1ヶ月～2ヶ月遅れとなっている。店売り販売は、電話も鳴らず低調。今が踏ん張り所、市況を維持し、与信に注意を払い、商売していく。

(溶協品) 8月の状況は、お盆休み前、休み明けの駆け込み需要もなく静かな状況。9月に入っても、もう一段、下がったような状態になっている。土木の鋼管杭は良い状況で年内は順調。中小建築案件は少なくなっている。現状は通常の7割位の需要と言える。9月、10月の建てる物件が極端に少なくなっている。12月の建方の話は多少聞こえてくる。溶協メーカーは高炉メーカーの値上げに連動している体制になっている。強気な発言はないが、そろそろ値上げが始まるという話が出ているので、そう遠くない時期に値上げ要請がくるのではないかと。今のところは現状を見極めて、話し合いながら商売していく。